

言葉と ともに踊る

ダンサー・振付家

森山開次

踊りは、身体の動きですべてを表現する、言葉を発しない世界です。私は言葉の表現がとても苦手です。もつと上手に喋ることができたら。心のままを自然に伝えることができたらどんなによいか。言葉に乏しく、とっさに気の利いた言葉を使うことができない自分を、よく嘆き、日々反省してばかりいます。

内向的で口数の少なかった少年時代。人前で言葉を発すると極度の緊張状態になり、赤面し、想いを伝えることができませんでした。言葉により人間不信になってしまったこともあります。私がふり絞った言葉が誤解を招き、人を傷つけ、傷つけられたりし、自信を失う体験を多くしたからでしょう。長い間、言葉の魅力よりも、その窮屈さ・歯痒さ^{かゆ}をより強く感じていました。特に言葉での自己表現にコンプレックスを持っていたのです。

そんな少年時代があったからこそ、踊りと出会ったとき、言葉のない身体表現さと素晴らしさ。踊りが言葉の魅力と大切さを教えてくれたように感じます。

振付を考える際、私は少年時代に習っていた書道からヒントを得ることがあります。書道の表現は、踊りそのもの。漢字やひらがなには動きがあり、まるで文字が踊っているようです。筆の強弱や、スピードとリズム。止めや跳ね、払い、滲み^{にじ}、かすれ。これらは踊りにおいても、非常に重要な要素です。文字の流れを体で追うと、美しい軌跡が生まれます。湧いてきた言葉を、思い切り全身を使い踊るのです。

私が講師を務めるダンスワークショップでは、参加者に「文字ダンス」を体験してもらいます。紙の上ではなく空中に書道をする踊りです。大人も子どもも、たとえ踊りをやったことがなくても、空中に文字を書くことは比較的抵抗なくできるからです。「あいいうえお」から始

に猛烈に惹かれたのかもしれませんが。人の姿や体の動きが語るものが、どんなに綺麗な言葉より信じられたのです。

私が踊りを始めたのは二十一歳ですが、すぐ流暢に自己表現ができたわけではありません。出会いは衝撃的でした。体操やサッカーなどスポーツをやってきた自分でも、驚くほど思うように体を動かさず、まるで赤子に戻ってしまったかのようだったからです。立っていること、たった一步ステップを踏むことすらままならない。足はもつれ、無様な姿をたくさん

め、自分の名前や好きな言葉を空中に自由な発想で書いていきます。手だけでなく、頭や足、お尻も使います。筆、マジック、シャープペン……。異なる筆記具になったつもりで体を動かしてみることもあります。

次に一つの言葉から連想し、振付を展览展示せ、短い踊りをつくっていきます。「あめ(雨)」だったら、文字が水で滲むイメージで動いたり、水滴が跳ねるイメージで踊ったり。同じ言葉を踊っても、それぞれ違う魅力的な踊りが生まれます。

さらしました。悔しさから、はじめはただひたすら練習に明け暮れましたが、一つ一つの動きを習得するうち、いつしか踊りの無限の魅力に夢中になっていったのです。それはまるで赤子の成長過程を再び体験しているかのようなでもありません。体で気持ちを紡ぐことの喜びを全身で感じたのです。

踊りと出会って二十年ほどが経ちました。言葉のない世界に逃れたはずの私が、踊りの豊かさ深さを知れば知るほど、不思議なこと、いつしか言葉に少しずつ惹かれるようになっていきました。体の中から湧いてくる想いを言葉でも伝えたい、時には大きな声で言葉を叫びたいと思うようになっていきました。言葉の響きや文字の流れの美しさ。言葉と言葉の間に想いを託し、その心を読み取る日本語。その美学は、私の目指す踊りに非常に共通していると感じるようになりました。想いを言葉に託し伝えることの難し

小さい頃、盆踊りの輪に入ることすらできなかった私は、子どもたちや保護者の方に声をかけます。「うまく踊れなくてもいいんだよ」。体はとても雄弁です。うまく踊れようが踊れまいが、踊りはその人のすべてを物語ります。体の存在そのものが、その人の、人となりや心を表現しています。そこにいるだけですでに誰もが踊っている。そして踊るとなると一層、その人の心が伝わってきます。踊りは言葉にならない想いを表現することができる。

小さな一言からたくさんの想いを受け取ることがあるように、大切なのは、踊りにしても言葉にしても、想いを込めることではないでしょうか。言葉については反省しきりの毎日、いまでも時に黙りこみ、無口な男になりますが、それでもやっぱり、この体も、言葉も、想いを込め美しく踊らせて生きたいと願っています。



森山開次
もりやまかいじ

1973年神奈川県生まれ。21歳でダンスを始め、2001年ソロ活動開始。初ソロ公演「夕鶴」以降、和の素材を用いた独自の表現世界で知られる。05年「KATANA」で「驚異のダンサー」(米New York Times紙)と評され、07年にはベネチアビエンナーレに招聘される。12年「曼荼羅の宇宙」で芸術選奨文部科学大臣新人賞、江口隆哉賞、松山バレエ団顕彰・芸術奨励賞を受賞。平成25年度文化庁文化交流使。映画・テレビ・写真作品など幅広い媒体での身体表現に積極的に取り組んでいる。

撮影:石塚定人